

被服系実習科目における雛形教材の有用性と問題点の検討

—ゆかたの実習を例として—

太田 茜

実習授業をオンラインを併用して行う場合、受講する学生の作業環境は多様であり作業スペースの確保が大きな課題になることが考えられる。そこで大学の実習室のような大きな作業スペースがなくとも製作が可能な課題としてゆかたの雛形教材を取り上げ、授業を行うこととした。雛形教材を用いた授業は材料の節約や作業時間の短縮が可能であり、また自宅での受講の難易度が高くなく取り組めることが明らかになった。しかし同時に雛形教材にも問題点があり実寸での製作が望ましいため、オンラインを併用した実習でも可能かどうかの検討を行った。

キーワード：雛形教材 和服製作 実習授業 被服製作 オンライン授業

1. 緒言

2020年度からコロナ禍により本校でも遠隔授業を行う必要性に迫られ、各々教員が試行錯誤をすることとなった。筆者は被服製作及び手芸関係の実習授業を複数担当（一部はアシスタント）しており、それらの殆どをオンライン、もしくはオンラインと対面の併用で行うこととなった。実習授業をオンラインで主に自宅で受講する際に課題となることはいくつか想定されるが、ゆかたの製作を主に行うファッション造形実習Bにおいては自宅での作業スペースの確保が大きな課題となると考えられる。ゆかたの製作ではその作業工程の中で最大170～180cm程度×60cm程度の作業スペースが必要であり、作業環境がまちまちであるオンラインでの受講の際にそのスペースを確保することが難しい学生が一定数発生することが想定される。そこで実寸での製作にかわるものとして主に明治・大正時代に広く行われていた裁縫雛形の製作を課題として授業を行った。

裁縫雛形とは明治時代から昭和初期にかけて多くの女学校の裁縫授業で取り入れられていたもので、衣服の大きさを縮小した教材（以降雛形教材と称する）を雛形尺と呼ばれる鯨尺を縮小した物差しを用いて製作を行うものである。2分の1から5分の1まで縮尺率は様々であり、特に東京家政大学所蔵の渡辺学園裁縫雛形コレクションはその量、内容の豊富さ共に圧倒的であり多くの先行研究がされている。それによれば雛形教材は少ない材料で製作できること、また製作時間を短縮できること、縫い方を学習する衣服の種類を増やすことができることといった利点がある¹⁾ことが明らかになっている。しかし、現在の大学における被服製作の授業では製図の習得において縮尺定規等を用いて4分の1や5分の1、2分の1の製図を行うことはあるものの、製作の授業で雛形を使用して製作実習を行うことは少ない。その理由としては現在においては材料を節約する必要性がさほどたかくないこと、ミシンでの製作の場合は製作時間の節約の効果があまり得られないであろうこと等が考えられる。また、中学校の家庭科での教材としてペットボトルに着せられるサイズのミニチュア浴衣が提案されている²⁾が、これは製作その

ものよりも和服そのものに触れ、ゆかたの構造や着装の概念を理解させることに主眼をおいている。そのため和服そのものへの関心を養うと共にゆかたの着装、たたみ方等は学ぶことが出来るものの、縫い代の始末などが簡略化されている³⁾ためこの教材で製作を行ったのちに実寸での製作を学生自身が行うことはやや困難を伴うことが予想される。しかし先に述べたように小さく作るということは材料の節約や、先述の大矢らの論でも明らかかなように必要な時間数が短くできるということもあるが、要求される作業スペースが小さくて済むという利点がある。そのためゆかたの製作を行うにあたって2021年度は2分の1サイズの教材を使用することにして、表1のような授業計画をたてて授業を行った。授業時間は2コマ連続の180分×15回で、実際の製作は13回分であり、学生は分散登校のため6回ないし7回実習室で作業を行った。また、基本的にはオンラインで受講した回の理解ができない部分を対面授業の時に解決するという形式のため、実習室での作業が6回になるグループの学生については15回目の授業の際に作業を行ってもいいこととし、回数の不均等を減らすようにした。前年度の2020年度前期は基礎縫いの授業のみをオンライン授業で行い、夏季に対面の集中授業にて実寸の製作を行った。

2. 方法

ゆかたの製作の材料としてはゆかた用の反物を使用するものと、洋服地を適宜裁断して使用するものがある。洋服地を適宜裁断して使用する方法は布地の選択肢が多く学生がより自由に色柄を選ぶことができるが、裁った布端の処理が必要でかえって時間がかかるため、布の織り端(みみ)をそのまま使える反物での製作を基本として行うこととした。また、和裁の雛形教材で多く使用されている縮尺は3分の1であるが、今回は反物のみみを効率よく使用するため2分の1での製作とした。まず図1のように反物をたて半分に切り、

長さを半分にして1本の反物から4着分の巻きをつくり、それを学生が選ぶ形式で材料を用意した。大きさを2分の1にするメリットはまず材料が少なくて済むことであるが、もう一つ大きなメリットとしては縫う長さが半分になることである。ゆかたの製作の場合、仕上がり身丈160cmとした場合最も縫いあわせる箇所が長いのは背縫いであり、ここが160cmから80cmに短縮されるため手縫いで2回縫うことを考えると作業時間の短縮という点で効果的である。2021年度は対面とオンラインを併用したハイブリッド授業であったため、学生は自宅で行った作業についてはGoogle クラブルームを通して作業状況を写真

表1 2021年度授業計画

回数	日付	内容
1	4/13	材料・用具の説明
2	4/20	基礎縫い・裁断
3	4/27	裁断・袖の印付け・袖を縫う
4	5/ 8	袖の続き・身頃の印付け・背縫い・くりこしあげ
5	5/11	肩当てを縫ってつける。衿と衿の切り分け・衿の印付け
6	5/18	衿の印付け・衿付け
7	5/25	脇縫い・縫い代の始末
8	6/ 1	裾をくける
9	6/ 8	諸々のくけ
10	6/15	衿の裁断、印付け・衿付
11	6/22	衿芯をいれる
12	6/29	衿先の始末、共衿をつくってつける
13	7/ 6	袖付け
14	7/13	袖付けの始末・仕上げ・たたみ方の練習
15	7/20	提出・ミニテスト



図1 実寸の反物と用意した2分の1の反物

で提出することで進度に大幅な遅れが出ないように、また縫い間違いなどに教員がはやめに気付くよう工夫した。写真は撮影する箇所とアングルを図2のように文章とイラストで指定し、教員がどこをチェックしようとしているのが学生にもわかるよう指示を行った。これは対面授業であれば机間巡視を行って縫い間違い等がないかの確認を行えるのであるが、オンライン授業の際は学生の手元をリアルタイムで確認することが難しいため、オンライン授業の回で間違えたまま進めてしまった場合にやり直しの時間をなるべく少なくすませられるよう考えた方法である。学生の受講環境は様々であるが、Zoomにつないだカメラで作業している箇所を写すよりは各々のスマートフォンやデジタルカメラ等で課題の途中経過を撮影し、Google クラスルームに提出する方法の方が確実に作業をしているところが確認しやすいと考え、このような方法で進捗確認を行った。また、作り方はプリントをまとめたものをテキストとして配布した他に縫い方の基礎について以下の6本の師範動画を作成し、YouTube にアップロードしたものを共有して適宜確認ができるようにした。師範動画の時間は20秒から2分35秒である。

- (1) 指貫をつかった針の持ち方
- (2) 針に糸を通す
- (3) 玉結びをする
- (4) 運針（なみ縫い）
- (5) 三つ折りぐけ
- (6) みみぐけ

実際の授業は Zoom を利用した双方向授業を想定して機材を設置し、ホワイトボード等を写すカメラとは別に手元を写すカメラを用意し、書画カメラのように実習室内のディスプレイと Zoom の画面に師範が写せるようにした。

3. 結果及び考察

3-1 雛形教材を使用したハイブリッド授業の結果と問題点

授業は概ね予定通り進行することができたが、対面授業の際に欠席が続いた学生やオンライン授業の回の提出をしない学生については進度を取り戻すことが難しく、その部分では全面的に対面で行う授業と同様の困難さが伴った。オンライン授業の際の進度は学生によるばらつきが大きく、進捗状況の報告がまちまちになってしまう事象がいくつかあった。オンライン授業の回に目標とした進度通りに進められない場合でもその時点での進捗状況を写真に撮って Google クラスルームに提出するようアナウンスを



図2 提出の際の指示の例
(Google クラスルームの画面)



図3 師範動画の例（なみ縫い）

していたのであるが、その通りにするかどうかは学生の性格に左右される結果となったのは否定できない。しかし Google クラウドに提出された写真を用いて作業の間違いや完成度が低い箇所については、概ね確認及び指摘をその都度行うことができたと言える。また、机間巡視による目視での確認に比べると即時性はないものの見落としが少なく済むというメリットも明らかになった。しかしこれはオンライン授業における Google クラウドを利用したことによる利点であって、雛形での製作による結果ではない。

ゆかたの構造を理解し、製作の仕方を学ぶという点と作業スペースの確保のしやすさという点では雛形での製作は大いに利点があることは改めて確認できたが、実寸での製作に比べると自分で着

ることが出来ないため課題を完成させるモチベーションを維持しにくい面が見受けられた。また、2分の1ではそこまで顕著ではないのであるが雛形での製作の際に気を付けることとして布の大きさが小さくなる分、厚みが相対的に厚くなることがあげられる。布の大きさは2分の1になるが、厚みは2分の1になるわけではなくそのままなので実際には布の大きさに対して厚みが2倍になり、細かい作業が必要な箇所は難易度がかえってあがることもある。このことについては大矢らの論でも触れられており、ゆかたの場合は特に衿周りや裾の額縁の処理にその傾向がみられる。したがってかつて行われていた3分の1での雛形製作は現在の本学学生の技術的には難易度が高く、2分の1での製作が妥当であったといえる。また、日常的に衣服製作を行う必要がある第二次世界大戦前の衣生活と異なり、現代は既製服を購入して着ることがほとんどであるため、雛形教材を1点製作したのみで実寸の製作が行えるようになるかという疑問が残ることは否定できない。実際に雛形教材を使用していた大正・昭和初期の女学校や裁縫学校の学生は在学中に制作する衣服の数が多く、作品を提出して返却された後に日常に着用するのが明らかなゆかたや普通の長着は実寸で製作した方が有用であったことが推測される。大正7年に東京裁縫女学校高等師範科（現在の東京家政大学）を卒業した卒業生の製作物の細目では雛形で製作されたものの他に実寸で製作が行われており、雛形と実物での製作が併用されていたことが以下のように述べられている。



図4 2分の1の雛形教材（ゆかた）

浴衣やいわゆる普通の着物である女物裕長着等の、日常的に仕立てる・着る機会の多い服は、おそらく実物大で製作されたため、雛形には見られない。雛形製作は、仕立てる機会の少ない服について、一通りの仕立て方を学ぶという役割が大きかったと考えられる。ある品目について実物と雛形のどちらで製作するのが効果的かという判断は、材料や時間等を考慮しながら、教師が状況をみて判断していたと推測される。ここでは寝冷不知だが、他に雛形だけではなく実物大で製作されている例として、子供西洋前掛や簡単服（子ども服）等がある。特に子ども用の服については、実物大であっても布地をそれほど使用しないため、実物大でも雛形でもどちらでもよいという扱いだっただけが見て取れる。⁴⁾

また、共立女子職業学校（現在の共立女子学園）所蔵の裁縫雛形の分析において和裁の雛形は袴などの下衣の点数がゆかたや長着などの上衣に比べて制作点数が多く、共立女子学園、東京家政大学双方で

その傾向がみられる⁵⁾ことから同様の推測が行える。つまり、裁縫雛形での製作による作り方の習得はそれ単体で成立しているものではなく、あくまで実寸での製作とあわせて行われることで効果を発揮していたのではないかと考えられる。したがってゆかたの製作のみを実習で行う場合は、実寸での製作の方が望ましいと考えるにいたった。前年度(2020年度)の授業は実寸での製作を夏季集中授業で行ったが、実習室内に収容できる人数が限られるため履修人数の制限が厳しくなる可能性が出ることで、連日の実習の場合は授業時間外に積み残した課題を行う余裕が学生にほとんどないためハイブリッド形式で通常の授業期間に行うための考えることとした。

3-2 実寸製作かつハイブリッドで行う授業の計画

あくまで実寸の製作を行うと仮定した場合に課題になることとして考えられるのはオンライン授業の回に行う作業内容を学生が理解できないことと、作業スペースの確保である。まず、作業内容の理解については説明を細かくのせたテキストと段階見本等を用意することである程度対応できると考えた。次に自宅での作業スペースの確保の問題であるが、実寸での製作の場合も最初から最後まで大きな作業スペースが必要なわけではない。そこで実寸での製作をする場合に必要なスペースの大きさを作業工程ごとに分類し、対面授業の際に実習室でその作業をできるように作業工程を工夫すれば実寸での製作が可能ではないかと考えた。図5でしめすように身頃の裁断・印付けが最も大きい作業スペースが必要であり、その大きさは和裁用へら台がひろげられる180cm×50cm程度である。しかし、実際の縫製作業についてはそこまではないため、対面授業の際に実習室の作業台(180cm×75cm)で作業を

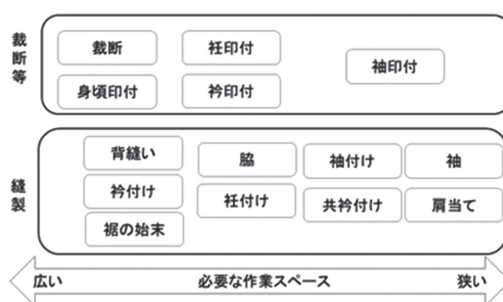


図5 ゆかたの作業工程と必要な作業スペース

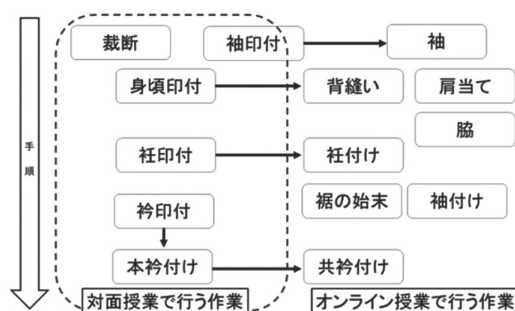


図6 ハイブリッド授業での作業手順のイメージ

表2 2022年度授業計画

回	グループ1	グループ2
1	ガイダンスと基礎縫い	ガイダンスと基礎縫い(オンライン)
2	基礎縫い完成させる(オンライン)	裁断、袖印付け、袖縫い
3	裁断、袖印付け、袖縫い	袖左右完成させる(オンライン)
4	袖左右完成させる(オンライン)	身頃印付け、背縫い、繰り越しあげ
5	身頃印付け、背縫い、繰り越し上げ	あげまで完成させる。肩当てつくる(オンライン)
6	あげまで完成させる、肩当てつくる(オンライン)	肩当てつけ、脇縫い
7	肩当てつけ、脇縫い	脇のみみぐけ(オンライン)
8	脇のみみぐけ(オンライン)	衿印付け、衿下くけ、衿つけ、のみみぐけ
9	衿印付け、衿下くけ、衿つけ、のみみぐけ	衿下くけと衿つけのみみぐけ(オンライン)
10	衿下くけと衿つけのみみぐけ(オンライン)	衿付け
11	衿付け	衿の本ぐけ、共衿つけ(オンライン)
12	衿の本ぐけ、共衿つけ(オンライン)	裾、袖付け
13	裾、袖付け	裾の三つ折りぐけ(オンライン)
14	裾の三つ折りぐけ(オンライン)	仕上げ・提出
15	仕上げ・提出・レポート課題	レポート課題

行い、残りの授業時間とオンライン授業の時間で他の工程をこなせるように作業工程を図6のように並べ替えた。図の左側の点線で囲まれた部分が対面授業で行う必要のある作業であり、その他は手順さえ理解していればオンライン授業でも課題を仕上げる事が可能ではないかと考えている。表2は登校するグループごとに作成した作業計画であり、2022年度の前期は千代田三番町キャンパスの学生は引き続き分散登校のため、この方法で製作を行う計画である。初回の授業はオンライン授業のグループの学生もZoomで参加し、リアルタイム双方向型の授業であるが、2回目以降の授業はオンラインのグループは各自事前に説明された内容に沿って作業をすすめ、分からない箇所についてはZoomで教員に直接質問ができるように授業時間内に一定の時間を設けることを予定している。

4. まとめ

2020年から始まったコロナ禍により被服製作及び手芸関係の実習授業をオンラインで行う必要が生じ、様々な試みが行われている。ミシンが必要になる洋裁の実習に比べるとほぼ手縫いで作業を行う和裁の実習はオンラインでの受講がしやすいと考えられたが、作業スペースの確保という学生の住環境に左右される課題が明らかになった。それを解決するため雛形教材での実習を行ったが、実寸での製作に比べると完成させた後に着用できるという学生のモチベーションの維持や細かい部分での難易度の上昇といった問題があり、雛形教材のみでは対応することのむづかしい問題点も明らかとなり、分散登校で実習室での作業日数が少なくても実寸での製作を行わせた方が効果は高いのではないかという結論にいたった。そこで実習の作業工程を必要なスペースごとに分類し、オンラインを併用したハイブリッド授業でも実寸での製作が行えるかを検討した。また、全面的に対面授業に戻った際も基礎縫いの師範動画やGoogle クラウドでの学生個人の進捗の把握などICT教材の利用を進めることで、より学修効果を高めることができると考えているので今後の課題としたい。

参考文献

- 1) 東京家政大学博物館編著『裁縫雛形』（光村推古書院、2019年）、14-15頁
- 2) 大矢幸江、薩本弥生、千葉眞智子「ICT教材「ミニチュアゆかた製作」を用いた学習とゆかた着物が着物文化への興味関心に及ぼす効果」『日本家政学雑誌』71巻2号、69-84頁、2020年
- 3) 横浜国立大学「ミニチュアゆかたの縫い方がわかる」
<http://kimono-bunka.ynu.ac.jp/miniature-yukata/mysitel/>（2022年3月閲覧）
- 4) 三友晶子「裁縫雛形を用いた裁縫教育の実態について：大正7年卒業生の製作品比較を通して」『東京家政大学博物館紀要』17巻、89-106頁、2021年
- 5) 長谷川紗織、高橋由子、田中淑江「共立女子学園所蔵卒業生寄贈作品について：共立女子職業学校制作裁縫雛形を中心に」『共立女子大学博物館年報／紀要』2巻、25-36頁、2019年

（受付 2022.3.25 受理 2022.6.30）